

## 日本文化研究国際化推進構想

## ① ビジョンの概要

今後の日本文化研究の国際的な進展に向けて、絶えず影響し合い変化していく集合体として日本文化を捉え直すために、海外の日本文化研究の多様な視点を国内の研究に採り入れ、異文化間対話を創出していく。

## ② ビジョンの内容

海外の多様な視点を国内の研究に採り入れる方法として、文化研究に関わる分野の国内外研究者による「日本文化」に関する学術的論考を集積した『国際日本文化研究叢書』を刊行する。同叢書を国内外の日本研究者に広く普及させることで、日本研究の新たな視座の紹介に寄与するとともに、日本研究の活性化を図る。また、海外での日本文化史研究成果のデジタル・アーカイブをオンライン・データベースに構築し、さらに国内外の日本文化研究者が様々な研究課題について自由に議論できるオンライン・フォーラムを立ち上げ、国内外の日本研究の相互作用を創出し、日本文化をグローバルな視点で捉える土壌を築き、熟成させていく。

## ③ 学術研究構想の名称

日本文化研究国際化推進構想

## ④ 学術研究構想の概要

(1) 日文研の監修の下で国内外の日本研究者に日本語と英語で「日本文化研究」のコンテンツの作成を依頼し、その集積を『国際日本文化研究叢書』として刊行し、国内外の研究者に相互の日本研究を発見してもらうきっかけとする。

(2) 海外での日本文化研究成果をオンライン・データベース化し、各日本文化事象についての研究成果並びに研究対象となる資料の画像データ、また国内の研究成果をも網羅的に掲載し、多様性に富む総合的な人文知を形成する。

(3) 国内外の日本文化研究者が様々な研究課題について自由に議論できるオンライン・フォーラムを実現する。

## ⑤ 学術的な意義

長い伝統に基づいた専門的な研究方法を用いる国内の日本文化研究においては、各文化現象について専門知識の蓄積がされてきたが、ほかの文化現象との相関関係についての考察や日本文化の全体像の俯瞰、世界の諸文化の文脈における位置づけといったグローバルな視点での研究に、多くの課題が残されている。

一方、海外での日本研究は、リージョナル・スタディーズとして位置づけている。その結果、より体系化された研究成果を生み出している。国際理解を深めるために必要な条件は、日本文化を世界の諸文化の集合体の中に位置づけて、その関連性をも含めて解明していくことである。文化の全体像を明確に把握するためには、専門分野間や地域間の橋渡しとなる研究手法の方向性を具現化する必要がある。

本構想は、このような橋渡しとなる研究の実現に向けた取り組みである。『国際日本文化研究叢書』のような、形として残る知識の体系を提供することで、国内の研究者はそれを常に参照できるようになる。また、オンラインのプラットフォームの提供により、国内外の相互作用を常時維持し、相互作用の結果として、国内外の日本文化研究を活性化し、新たな知の視点と学術的価値を創出していく。

データ蓄積や翻訳技術の開発においても、コンテンツ収集、翻訳作業、オンライン・データベース化、データ蓄積と活用の各段階を一巡させた後は、コンテンツを順次追加し、再びこのサイクルを長期的に循環させていく。この過程を通じて、データベース蓄積や機械翻訳の新たな技術発展の可能性と、異なる領域のデータ同士が相互に有機的につながっていく効果が期待される。

## ⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

異文化を背景とする研究者による視点からみた日本文化には、国内研究では気付かなかった意外な側面が投射される。海外の研究視点を取り込みつつ、国内外でそれぞれの手法で進展してきた優れた研究成果を相

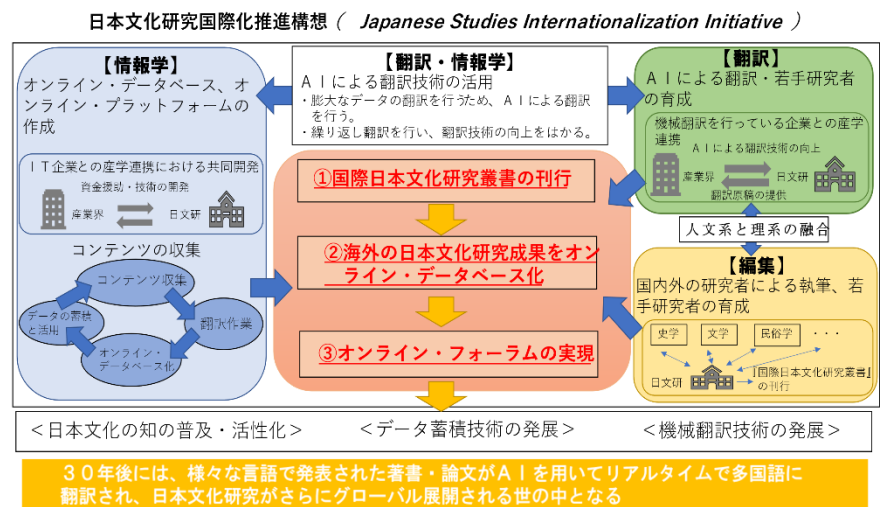


図1 日本文化研究国際化推進構想 概要図

互に有機的に結び付け、世界における日本研究の融合体を創出する基盤として本構想を位置付けている。

## ⑦ 社会的価値

世界がグローバル化する中で、異文化間の対話が極めて重要な役割を果たす。海外の日本研究の視点を国内の研究に吸収することにより、日本文化の独自性を投影させ、ほかの文化との共通性を見出すという知的価値の付加を通じて、日本社会の国際化の促進につながる。

また、海外の日本文化研究の成果をオンライン・データベース上の一箇所に集積収集し、拡張させることにより、日本文化研究者コミュニティの資料調査を効率化させ、SDGs への貢献にもつながると期待される。

## ⑧ 実施計画等について

実施計画・スケジュール

### (1) 準備期間（1～3年目）

日文研内の制度設計の策定を検討するとともに、国際日本研究コンソーシアムとの連携を行い、連携・協力可能な機関や企業への連絡・協議を開始する。『国際日本文化研究叢書』の内容構成・編集や本構想のプラットフォーム構築、機械翻訳の技術革新・精度向上について、それぞれの国際ワークショップを開催する。

### (2) 始動期間（4～5年目）

編集チーム、翻訳チーム、情報学チームに必要な人材の雇用・編成をしたのち、計画作成を開始する。編集チームは教員と連携して『国際日本文化研究叢書』の構成を検討、翻訳チームは機械翻訳の技術開発方針を検討し、各分野における専門用語などの訓練データ及びシュミレーション・データの蓄積に努める。情報学チームはプラットフォームと技術的課題について検討する。『国際日本文化研究叢書』の内容・編集やプラットフォーム構築・改良、機械翻訳の技術革新・改善についてフォローアップ国際ワークショップを開催する。

### (3) 実施期間（6～10年目）

『国際日本文化研究叢書』におけるコンテンツの区分ごとに、国内外の研究者による国際シンポジウムを開催し、各シンポジウムの成果を同叢書に盛り込む体制を整えるとともに、海外の日本文化研究者に執筆を依頼した原稿の編集・翻訳作業に取り組み、『国際日本文化研究叢書』の最初の10冊を順次刊行する。データベース及びオンライン・フォーラムのプラットフォームを構築し、コンテンツの収集と公開を実施する。実施機関と実施体制日文研が中心となって実施する。日本文化研究の知識を有する編集者、トランスレーション・スタディーズの専門家、IT分野の専門家それぞれ2～3名程度の雇用が必要である。これらの専門家と日文研教員との連携を通じて、日本文化研究の国際化に関する相乗効果を得ることができる。

日文研には20名の専任教員が在籍しており、各教員が自分の専門分野のうち、国内外の研究者から執筆者の人選を行い、編集チームの調整の下で叢書のコンテンツを充実させる。

海外の研究成果を日本語に翻訳するために、翻訳チームが情報学チームと連携して、機械翻訳の開発を進めていく。専門用語の翻訳作業においては各教員の協力も得る。機械翻訳の精度向上には、翻訳対象分野のコンテンツに関連する大量の訓練データの入力が必要である。この作業実施のためには、日文研単独ではなく、当該分野の専門家から支援を受ける仕組みを構築しなければならない。様々な分野の対訳データの収集のために「国際日本研究」コンソーシアムとの具体的な連携体制を検討していく。

データの集積・活用を実現させるために、情報学チームを編成し、人間文化研究機構の人間文化研究創発センター及びデータベース構築や機械翻訳の開発に取り組んでいる国内外の企業・研究機関と連携を模索する。国内外の院生や若手研究者を積極的に関わらせる体制を整備し、研究者育成の機会も創出していく。

総経費：910,745千円（概算）

所要経費(1)人件費：612,000千円（編集チーム：3名、翻訳チーム：3名、IT専門家：2名）

(2)海外研究員の謝金：61,665千円 (3)データベース制作：45,080千円

(4)叢書の印刷費用等：92,000千円 (5)その他費用：100,000千円

## ⑨ 連絡先

井上 章一（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国際日本文化研究センター）